

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認誌第三五二号)
昭和十四年六月二十五日印刷 昭和十四年七月一日発行

第三十五卷

第七号

目次

表紙 「浄土」

松涛達文画

特集 おぼんと生活

常夏ハワイのお盆行事……………松涛弘道…(2)

なつかしいお盆……………河原信三…(5)

座談会 おぼん昔と今……………(8)



シルクロードとコーカサスへの旅日記…佐藤治子…(11)

十二因縁⑦ 受教と発心(受)……………渋谷賢応…(16)



シルクロードの遺品 ハラ・ホトの弥陀来迎図

細田豊明…(19)

助け合いの生活を……………服部光喜…(22)

仏事の心得とお作法② 数珠について……………福西賢兆…(24)

ハガキでひとこと お盆と私……………(26)

読者の声 信徒への道……………大橋秀雄…(29)

ひとくち伝記⑦

古文書を集めた徹底上人……………高橋良和…(30)



今月のことば

梅雨あけの太陽はまぶしい。真赤な太陽にさそわれて、人々は海に山に冷氣をもとめてゆく。しかし現代人においては、一人静かに浜辺に涼をもとめて、山間の清水に静寂を味うことはできにくい。

道はしばらく（須臾）も離るべからざるなり。離るべきは道に非るなり。是の故に君子はそのみ（賭）ざるところに戒慎し、その聞かざるところにきようく（恐懼）す。隠れたるよりもあら（見）われたるはなく、微かなるよりもあら（顕）われたるはなし。故に君子は、その独りを慎むなり。

これは中庸の巻頭の一節であるが、仏教のおしえるところ、そのままである。

み仏のおしえる道は、われら衆生と共にあるのであって、これを離れているわけではない。つねに無辺の光明と無量の慈悲をもって、衆生万物をいつくしみ、みそなわしておられる。つまり、いつも見ておられるのがみ仏である。

われわれの肉眼に、そのお姿がみえぬからといって、不謹慎であってはならない。またそのおしえは、直接、耳に響かぬといって、放逸懈怠であってはならない。

み仏のみ心にそわぬことを、あえて為そうとして、それが微細なことであつても容易に露顕するものである。

仏の道を修するものは、まことに身を慎しむことを心がけねばならない。

最近、東京の山手のあるお屋敷に伺ったら、一室に「慎其独」と書いた扁額をながめて、その家の主人の風格を偲んだことがある。

涼をもとめて右往左往するよりも、独り慎しんで、静寂のなかに、心に涼を味う方法を学ぶ必要がある。

特集 おぼんと生活

=その1=

常夏ハワイの盆行事



松 濤 弘 道

(栃木市近竜寺中)

一年を通じて四季のないハワイは南国特有の強い陽ざしに照らされ、日中の街路のアスファルトは焼けつくように熱い。午さがりともなれば陽炎(かげろう)が立ちのぼり、人々はそれぞれ緑陰で午睡をとる。しかし南から吹きつける蒸暑いコナ風を除いて、ハワイは年中心地よい貿易風に見舞われ、炎天下といえども一度樹蔭に入ると清涼な微風が頬をなでる。こんな時には思い出したように山手より一塵の風が舞下り、シャワーは樹々をよみがえらせ、人心を和らげる。極彩色の虹は中空にかかり、小鳥のさえずる声が急に高くなる。赤土の乾ききった米大陸の荒野や、灰色の埃にまみれた日本の風土と比べて、何とハワイは美しい楽園なのである。一度この地に印した者にとって、あくまでも澄みきった

コバルト色の空や海、白銀の砂浜や緑の樹木は終世忘れる事が出来ない。それ程までにハワイの自然は美しく、あざやかなのである。

ハワイのお盆行事はこうした環境の下で、四季の折り目をつけるかの如く日系仏教徒によって行われる一年に一度の父の日、母の日なのである。日本でのお盆行事と比較してハワイでのそれは基本的には変る訳がない。もしあるとすればそれは規模と心構えに於てであろう。

お盆の季節ともなれば、仏教各寺院教会は急に忙しくなる。

各檀徒への案内状の他に、日刊の「ハワイタイムス」や「布哇報知」紙上に二段抜きの盆法要広告を出し、期間中は連日

にわたり法要と説教を欠かさない。中には昼夜二回の法要や青少年向きの特別法要の他、病院や養老院への慰問を行うところもある。会堂は連日参詣者で賑わい、境内はその車でうずまる。寺院附属の納骨堂には色あざやかなアンスリウム、極楽鳥オーキッド、ヘレコニヤ、ハイビスカス、シンジャヤー、カーネーション等の花々でうずまり、菓子果物等が供えられ香煙の絶える間がない。其処では御仏達の生前中の好物であろうか日本酒やビールも供えてあるのが散見される。法要そのものは日本と大差なく、椅子席の会堂に於て厳肅にとり行われ、変った点では会堂の前庭に十尺余の盆供養の大塔婆が四百本近くも立ち並び、二河白道に譬えて会堂内の御本尊よりの白布に一本一本しっかりと結びつけられている。この御塔婆料だけでも一本二十弗（邦貨約七千円）かかるのであるから、檀家の負担も大変なものである。参詣者の服装も色とりどりで、男性は背広やアロハ、女性はドレスやムウムウ、ホロク等それぞれの好みに合わせ、一家揃ってのお寺詣りはほほえましい。

各寺院教会には納骨堂はあっても附属墓地はなく、檀徒の多くは寺詣りの後、車でそれぞれの墓地に詣でる。緑の芝生のきれいに刈込まれた共同墓地は大抵見晴しの良い山腹であり、一見したところ起伏の多い緑地か公園と間違えられる。

最近出来た墓は地中に埋められ、その真上に来て始めて墓の所在が分る。こうした墓地がお盆の季節ともなると花の山に一変するのである。最近では、此等公園墓地の一角に日本の有名な寺塔を模した礼拝堂が葬儀社の手によって建てられ、周囲には池庭を配し、始終手入れが行き届き、百花撩乱、ムード音楽さえ流れ出て、正に阿弥陀経中に画かれた極楽を此の世に現出させているかの如くである。その設備といい、規模といい、安息所にふさわしい演出効果は教会人の等しく見習うべきもので、伝統のない新興家族は墓地のない寺院教会に詣でて束縛されるよりも、気兼ねのいらぬ此等葬儀社経営の公園墓地に引き寄せられ、その数は日増しに増大している。

送り盆の当日は会堂での結願法要の後、精霊船を模した花自動車に供物をのせ、真紅な夕日の沈む頃、参詣者は各自の車に提灯を飾り、警官の白バイを先頭に、近くのケワロ湾まで行列する。其処で多くの参詣者や見物客の見守る中を精霊船は本物の船上に移され、読経の声と共に船は岸壁を離れる。海岸の人々はみ仏達の永遠の旅路を見送るかの如く、船の次第に遠ざかるのを船火の波間にかくれるまでジットあかずに眺めている。海岸より五マイル離れた大洋中にただよう船中では同乗の人達によってみ仏達に幸あれと流れ灌頂の法

要を営み、精霊船を送り出す。精霊船は此の世に未練があるのかなか母船を離れず、背手の遠くに沈むホノルル市街の夜景はダイヤモンドをちりばめた銀河の流れにも似て、正に幽明界を異にする幻想の世界に浸る感がある。フト我に返ると船はエンジンの音も高くケワロ湾目指して帰路につき、大地に印して再び此の世の人となる。こうして目まぐるしく賑やかだったお盆の行事も、精霊送りを最後として幕を閉じまた元の平静さに戻るのである。

何故、異国にあってこうした行事が母国以上に盛んなのであろうかといぶかしがる人が居るかも知れない。私は決して不思議だとは思わない。滞布中の知人にお盆の季節ならずとも毎朝欠かさず職場へ向う途時、先祖のお墓に立寄り、線香を手向ける感心な青年社長がいるのを憶えている。彼ならずとも、毎日照日には一家揃って寺や墓詣りをする日系人は数知れない。キリスト教の影響下にあるとはいえこの習慣はハワイでは日常化され、かえって行かぬ者の肩身が狭い。此の祖先をしたう気持は、遠く母国を離れ、あらゆる辛酸をなめ、一人立ちになった経験がなければ恐らく分らないであろう。日系人の祖先の多くは嘗て労働移民として渡布し、裸一貫で働きつくし、自らを犠牲にして子女の養育に将来の希望を托したのである。此の親心をその子女達は肌で感じとり、

その恩の万分の一でもむくいようと心に誓い、成人し親となつて初めて生きるつらさと有難さをいやという程感得し、やむにやまれず御先祖に手を合わせるようになったのである。しかし此の心情の発露が、ようやく安定と繁栄をもたらした日系社会の人々にどこまで保持されるかはなほ疑問である。贅沢三昧に慣れ、親の苦勞がかえって子を甘やかす結果となった多くの日系家庭では、親子の意志の疎通に欠け、日本的風習を堅持する親をかえって奇異な目で眺める子女が増加している。日本的風習を拒否し、アメリカ的にもなり切れぬ日系子女の将来は決して生易しいものではない。これはひいては日本の青少年の立場にも一脈相通するものがある。現代人には、日本やハワイの別なく、はたしてすまない、有難いという感謝報恩の気持があるのだろうか。もしないとするれば、お盆の行事だけでなく全ての宗教行事は、ただ後向きのしきたりや、横向きの義理や世間体にな左右されて仕方なく行ふ寺院や家庭の行事に終つてしまふのではないか。そうならない為には、もう一度我が身を振り返り、甘やかされた現代の安易な生活の底にひそむ人生のはかなさに目醒め、いっような事態に遭遇しても決してうろたえない強靱な心身を平常から養い、常に前向きの姿勢で、真の宗教行事の意義を考えなければならぬであろう。



なつかしいお盆

河原 信 三

(全国味噌連合会会長)
(信州善光寺総代)

かたみ子や母がくるとて手をたたく

一茶

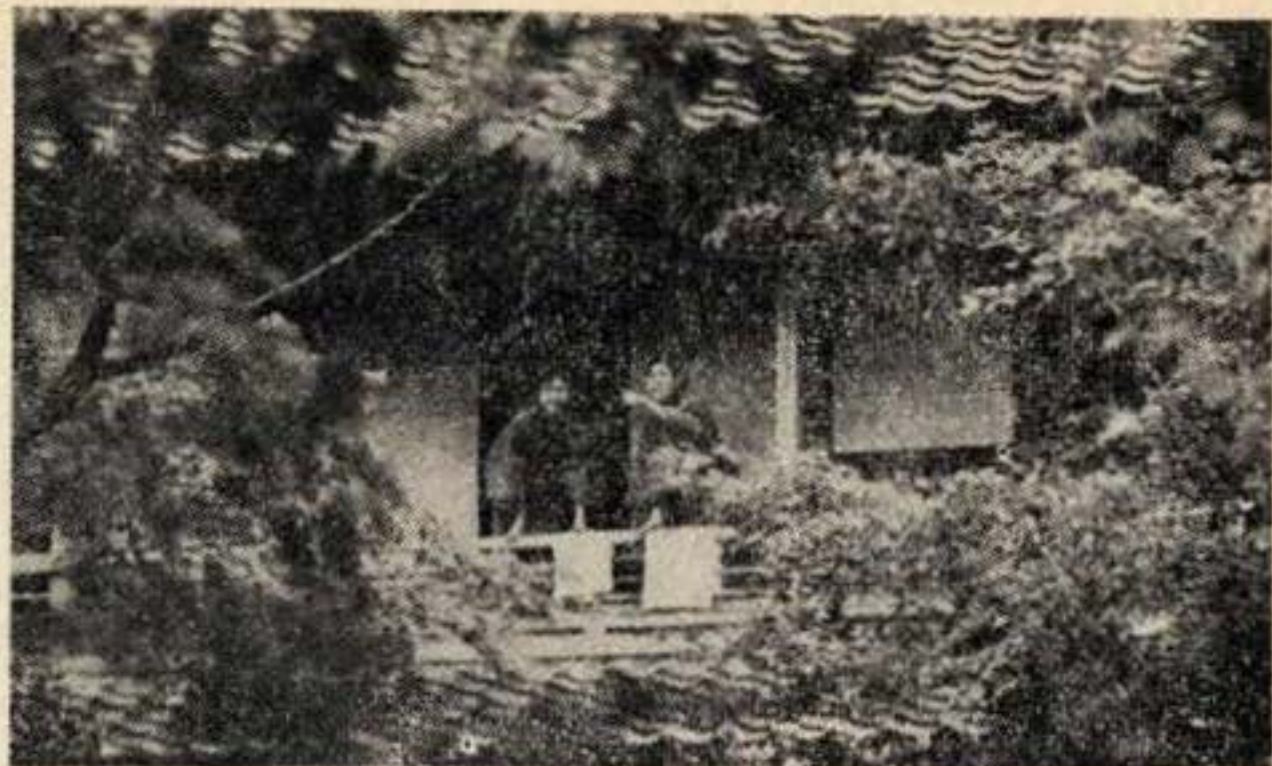
お盆ということを知ると、ふと、縁をむすんだいまはなき人びとのことが偲ばれたり、遠く離れた郷里のことや、幼き日の思い出が彷彿と浮んでくるから、ふしぎである。これほどに、お盆は、わたしたちの生活のなかに染みいつている、なつかしい行事である。

お盆を迎えると、古ぼけたお仏壇からご先祖さまのお位牌をとり出し、あらたに設けた別壇の精霊棚には新しい仏さまを中心にして飾り、その前にまず、馬や牛になぞらえてきうりやなすに丸箸を折って脚をつくり、いくつも並べるのである。

ご先祖さまは、この乗りものによってお盆中お帰りになるという。てんぷらや、そうめん、そして果実等、あらゆるご馳走をお供えして饗応するのである。

農村の子供たちは、何時もなら暗くならなければ入浴しないのに、お盆の十三日には明るいうちにすませ、真新しい浴衣を着せられ、兵古帯に団扇をはさみ提燈を手に、白樺の皮をもって、墓地へお精霊さまを迎えにゆくのである。田圃の畔道を同じようなスタイルの子供たちの行列がつづく。

お墓の前では、蠟燭に火をともし、白樺に燃やして、子供も、大人も、「ちいちゃん、ばあちゃん、このあかりにおいでやい、おいでやい」と口に称えるのである。お精霊さまは、このあかりをめざし、呼び声にさそわれて、娑婆に帰る。



て来られる。墓地より家路へ帰えるころには宵闇がせまり、提燈のあかりが田植えの終った水田に映えて、美しい夜景をなす。自宅の玄関先まで、また迎え火を焚いて、お精霊さまを棚まで案内して、家族ともども会食がおこなわれるのである。ひととき、故人の思い出ばなしやら、エピソードに花がさく。十四日、十五日は親類や縁者が往き来し合って、亡きみたまと生きみたまとのあたたかい対話がつづく。そして、十五日の夕刻には送り火を焚いて、迎えたときと同じように、提燈のあかりを先頭にしてお墓まで送るのである。十六日の朝にはお精霊棚を川へ流して、お盆の行事を終る。遠く都会へ就職して帰郷していた兄弟たちも、親戚の人たちも、別れを惜しみながらそれぞれ散

ってゆくが、そこには別れの侘びしさは微塵もなく、ほのぼのとした心の温もりが、いつまでも残るのである。

送り火は静かに消えて虫の声

旧のお盆の頃であつたらうか、東北のある山村を訪ねたとき、その土地の農家に一泊したことがある。七十を過ぎた老人は、こんなことを話してくれた。

「杉の植林をするときに、一定の距離をおいて植えていくのだが、その距離は、だいたいきまつているようなものだが、山の傾斜のぐあい、地味をよく考えて植えてやらないうと、杉はいい樹にならない。くつつきすぎでは、おたがいが土地の滋養をとりっこしたり、枝がじゃまになって育たない。離れすぎると、大風のとときに支えがなくて折れてしまう。そう、いいぐあいの距離というのは、大風が吹いたときに、おたがいがかばいあえるくらい。ふだんは、風でコズエがふれ合う程度の距離ということでしょうねー。そして、いろいろ話はずんだとき、その老人は、ぼそつと「親子も、こうでなくちゃいけませんね」と言った。

「大風が吹いたときは、おたがいがかばいあい、ふだんは風でコズエがふれ合う程度の距離」を、人間と人間の間柄もそ

うだし、とくに親子の間柄はかようになくはならぬということだろう。

現代における人間関係の複雑にしてむずかしい様相のなかで、とくに親子の関係はむずかしい。親子はくつつきすぎても過保護になるし、無関心になりすぎても困る。風邪を引いてはいけないとボテボテに厚着をさせ、あぶないからといって、外の遊びを禁止し、人さまのものを欲しがるといけなからと、欲しいものを買ひ与えこれでは人間が育つはずがないのである。

「育つ」とは、もともとは「巢立つ」と同じ言葉だと聞いたことがある。子供を育てるということは、別のいい方をすれば、親からしだいに離れていく、ということであろう。

だから、「育てる」とは、離れがたい気持をおさえながら親の方から分離をしてやる、ということもできる。

親が子を「育てる」というのは、まず、守ってやることへ保護、つぎに、教えてやることへ教育、そして自分で判断することへ自立を順序よく発展していくことである。

○

父に慈恩あり

母に悲恩あり

その故は

人のこの世に生まるるは
宿業を因として
父母を縁とせり

—父母恩重經—

現代は人間疎外の時代といわれる。親と子があたたかい情愛をかわすことができない。生きているもの同士が気持ちを通じ合うことができないのだから、まして亡くなった人や、仏さまとは通じ合うことができないのは当然ではないか、という暴論をばく人がある。まったくの暴論であって、実は逆である。

このわたしを育ててくれた、いまは亡き人びとに手を合せ、懐しく偲ぶような心をもつことのできぬような人が、なぜにお互に情をかよい合せることができようか。み仏を信ずることのできる人は、至極当然に、生きている人びとと信頼し合うことができるのではないかと思う。

お盆の行事は、遠いむかしより、年々歳々うけつがれてきた。いがみ合い、きずつけ合いながら生きていくわたしたちは、なつかしいお盆の行事を通して、親と子のあり方、社会と人のすがたを、人情自然のあらわれのなかに、はぐくんでゆきたいものである。

お盆それは心のふるさと

司会 本日は篤信の在家読者の方々にお集りいただき、お盆を中心に生活の中につちかわれた仏教信仰、あるいは日頃よりお考えの点などをお話しいただきたいと思います。

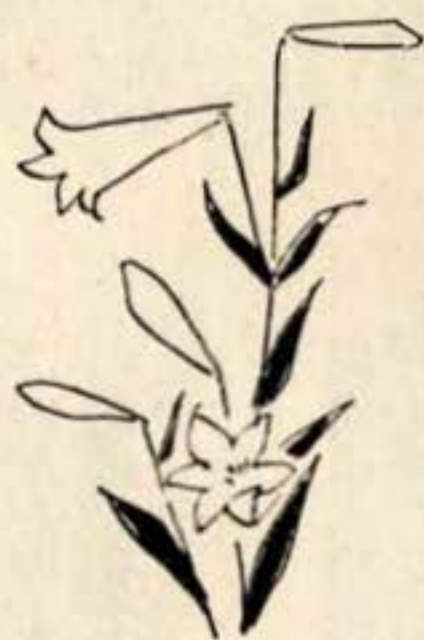
秋元 私は東京に生れ育ったためかお盆といっても、あまりよく分らないのですが、地方にはそれぞれいろいろな行事があるのでしょうね。

小柳 行事そのものは似たりよったりでしょうね。どうも最近の若い人々は照れくさがってあまりやりませんね。

司会 お盆とかお彼岸は日本民族の中に土着しているものです。教理とか思想ではなく生活慣習の一端です。お盆の頃の上野駅など帰省する人々でいっぱいになりますね。

小柳 特に北陸方面は真宗の影響と思われるますが熱心ですね。お盆などに帰省し昔話をしたり、先祖を思ったりという、日本人の心のふるさとという点で、仲々良い習慣だと思

おぼん昔と今



出席者

雄 朝 元 秋
(東京都大田区貴金属商)
晟 柳 小
(東京都江東区木材商)
司 政 出 中
(日本冷蔵主任研究員)
助 勇 田 吉
(東京都江東区在住)
部 集 編 会 司

います。

司会 最近ではやぶ入りという形としてはなくなりましたが、正月やお盆に帰省し家族・友人などに会うということ、それは大変たのしいことでしょうね。

中出 最近横浜などでは、お盆のしきびなど買い求めるのが困難になってきております。

司会 御請来さまという考え方、例えば私の知人の九州出身のあるお医者さんは、小さい頃迎え火を焚き、その煙にのってみたまが、おじいさんおばあさんがやって来るのだと教わりました。今日、都会生活をしていても、その頃のことになつかしく、長男などは気恥しいからよしてくれといいますが、今でも続けておりますといっておりました。地方によって様々ですがナスやキュウリで作った馬や牛にのり、迎え火に導かれて来、盆中家族と生活し、送り火に、あるいは手作りの灯籠船に乗って帰っていく、こうした心暖まる行事は大切にすべきでしょう。

小柳 こうしたものは仏教的行事という面もありましょうが、先祖崇拝という形が強いともいえましようね。

中出 私なども小さい頃、門の一番先にナスやキュウリを置き鐘をたたかされました。近所に恥ずかしいですから小さくたくと、もっと強くよく叱られました。そんな時、本当にお先祖さまが階段をあがってくるような気がいたしました。

秋元 無下に古いからといって敬遠するのはおかしいと思います。良い習慣はそれとして延々となし続けて来たのですからね。浄土宗としてはお盆に特別の行事があるのですか。

お盆の由来

司会 これは特に浄土宗ではというのではなく、各宗共通した扱いの方の中で取り行なわれております。お盆に附随してお施餓鬼というのがありますが、お盆というのはお釈迦さまの十大弟子の中、神通第一といわれた目連尊者の孝養、母を思う気持から始まったもの、お施餓鬼は多聞第一といわれた阿難尊者が修行中に焰口という餓鬼に施しを乞われた、もし施さねば三日にして命を奪うといわれ、お

釈迦さまのところへご相談に行きましたところ陀羅尼を授かり、それを唱えることによつて餓鬼を救ったという話から始まっております。ですからお盆の前後にどの寺でも施餓鬼会を修め精霊の供養をしているのです。

吉田 季節との関係はどうなのですか。

司会 安居あんこといって雨期に入ると僧侶は布教行脚することが困難ですから、一定の地にこもり修行したのですが、この安居が終ると自恣しという反省会を開き、修行も完全に満ちたものとなれば、その後その僧侶が集まり施餓鬼会を修めたのです。浄土宗でも六月に知恩院で夏安居げあんこという集まりがあり修行し、それぞれ帰った後、七月にお盆・施餓鬼会を修めておりますが、そうした修行のなごりともいえるでしょう。

吉田 その餓鬼に施しをするということを現代的にどのように理解すべきでしょうか。

司会 ものを与えられても満足しない、むさぼるのが餓鬼といわれておりますが、今日私たちの生活はめぐまれますぎてはいるものの、更に求めようとしている。換言すれば餓鬼道の姿とでもいえると思います。ですから迷い

と悟りの世界を十種に分け、六凡四聖といわれる四聖をめざし、現代といえども施しを受けなければありがたいという気持を持ち合わせるようにつとめるべきでしょうね。

日常生活と共にある宗教心を

司会 こうした施しや行事にしても本来は仏教から出た事項でも、生活の中にとけ込んでなされると、それらは真摯に受けとられておりますね。

小柳 厳肅なものと取られ、感謝の念で行なわれるのは当然でしょうね。

司会 例えば山登りにしても、山を神聖化したものと踏まえ杖などに六根清浄と刻み、その語を唱えながら身も心も浄めて登りきる、所謂信仰の対象として考えた訳です。こうした自然に対する畏敬の念が薄れて来たことは残念ですね。

秋元 そういう気持で登った時の方が事故は少なかったでしょうね。征服するといったものではありませんから。こういう点から信仰ということは現代のような世にこそ必要だと考えます。

司会 人間が謙虚になる時というのはそうし

た仏とか神とかの存在を前提として、それらと比べて自分が見にくいという時ではないでしょうか。

秋元 そうした中に自己を発見していくのではないのでしょうか。

司会 そうですね。こういうところから法然上人の念仏観は偉大ですし、敬服いたしますね。自分自身の力というのではなく、仏の光に照されることによって自分の見にくさが分り、その光りによって浄化されるということだと思いますから、こうしたことより念仏為先と申されたのではないのでしょうか。

秋元 一年に一度のお盆は信仰の上からも続けていくことは必要だと思います。よく考えますと、私たちの日常生活の中には仏教的なものが多く入って来ております。ただ古いというだけでそれを無視するならば、人間が人間らしからぬ方向へいってしまうような気がいたして仕方ありません。

若人に芽生る信仰を

司会 そういう意味で、人間性を回復する上からもお盆の行事など大切にすべきでしょうね。先程出ましたが、昔は帰省はお墓参りな

どと共に盆踊りとか、花火大会などとレクリエーションの場でもった訳ですね。今日では週休制など社会構造の変革から多少異なってますが、帰るといふ習慣としては残っているのではないのでしょうか。

小柳 季節的な面から農閑期に帰り、これらの豊作を共々祈るところから出ていると思いますね。

吉田 家族制度の崩壊とでも申しましょうかもうそうしたことは面倒だからとなされなくなつて来ていますね。残したいと思つても若い方の考え方が違つてきていますから。とても残念なことだと思います。

小柳 核家族といわれますように、分散して来ますと、仏壇をまつていない家庭がどんどん出てきますので結びつかない訳です。

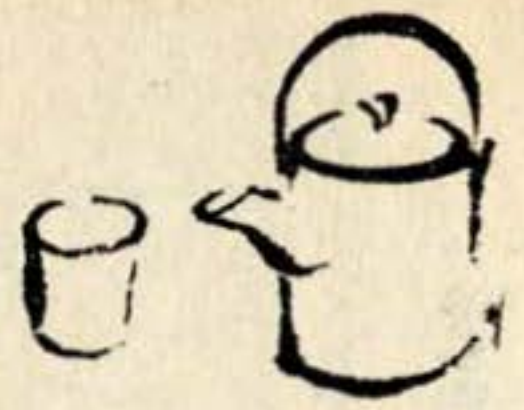
司会 単なるお盆への郷愁というのではなく、お盆の心というものを現代の生活にいかにかかしていくかということを真剣に考える時に来ておりますね。分散すればする程、氣持を通わせる必要があるでしょう。例えば母を思うという時、民法上扶養するといふのではなく、母のいのちを考へるといふようなものでは

ではないのでしょうか。

吉田 私はもっと若い人の中にこうした氣持が生れてくるよう望みたいです。それは伝統のものとは違ったものとなつたとしても、その中に流れる氣持さえあれば良いと思います。

秋元 ただ盆踊りなどという形で残っていたのでは仕様がありませんが、自然消滅の形で消えていくのはさびしいことですね。

中出 今私の会社にヒンズー教徒のインド人がおりますが、彼は日本に宗教があるのかと不思議がつておりました。戦前は少なくとも子供はお釈迦さまの誕生日は知っておりましたといひましたら、その程度ですかと、日本における宗教活動の少さに驚いておりました。**司会** もうご承知かと思いますが、総本山知恩院では「おてつき運動」を展開し、その中青年部・少年部の活動も重点的に行なっております。こうした運動を通して形にあらわされた信仰というようものがどんどんなされることが必要でしょう。本日はお忙しいなか、お集りいただきありがとうございます。この会が皆様の生活に幾分なりとプラスになれば幸いです。



シルクロードとコーカサス

への旅日記 (第二回)

佐藤 治子

三月二十五日。六時起床。船で同室だった山崎夫妻を御起しする約束はしたけれど、電話も字がよめない為、かけることができない。仕方がない、お部屋をノックしてあげよう。そして七時朝食をとった。バスへ乗りこむ。

「イントユーリスト」

これはソヴィエト国営の交社の事である。ソ連へ入国すると交社の人が必要附添って世話をする。汽車の中でも真面目な感じの朝鮮の人が世話をしてくれた。ハバロフスクのバスには別の朝鮮の人が乗り込んでペラペラの日本語で市内見物のガイドを勤めた。

ハバロフスクの日本人墓地を悲しい思いで参詣した私達には、船と夜汽車の疲れも手伝い、このガイドさんの冗談を交

えた話しぶり、アイジョーシの歌を上手にまねてふざけたような態度で歌う、たしかに歌は上手である、けれど何か心が離れて行く感じであった。このバスにソヴィエト人の立派な風采の青年紳士がのり込んで、だまって後の席についたのが私は気になっていた。それは大分前、西ドイツから東ドイツへバスで入った時、通訳の男の人と別に女の人がのり込みノートとペンを持って、私達の近くの席にこしかけた。まるで皆を、そしてこの通訳を監視しているかのような冷い顔。このことをふっと思い出したのである。ソ連への旅行者は一人でも団体でも必ずイントユーリストの人が船まで、そして駅まで、或いは空港へと到着する場所へ迎えに出て、ホテルから観光まで旅行者の世話をする仕組になっている、大きな組織があり、彼等は公務員なのだそうだ。

さて、空港へのバスへ乗り込んだ私達と一緒に前日みたこの青年と中年のソヴィエト婦人が乗って来た。そして歌をうたったあの朝鮮人のガイドさんも乗り込んだ。「毎日エージェント」の山梨さんという若く美しい、そしてロシア語のできる人がこの青年と婦人を紹介した。「皆様。ユーラーと申します。何卒よろしく」と。あの青年紳士は挨拶した。何と素敵な日本語だろう。態度も丁寧でニコニコとしている。なあんだ通訳さんだったのか。私の顔はほころびた。ユーラーさんはモスコ大学を出たエンジニアで、特に日本語を学んだそうである。エリーナさんはボスらしい。ハバロフスクからモスコまでの長旅をこの二人はずうっと附添って世話をしてくれたのである。もう一台のバスにはエレナというかわいいお嬢さんの通訳がいた。この人たちは親切で、エリーナさんは歌もダンスも上手で、話せる日本語は「ミナサーン。行きましたようー」だけで、この「ミナサーン」が皆をどんなに楽しませてくれたことだろう。朝鮮人のガイドさんは空港まで送って来て、ガイドのバトンはユーラーさんに渡されたのである。そしてこの人は行く先々で忘れられない思い出を残してくれたのである。

「ソ連の飛行機」

飛行場に着くとどこにも「イントユーリスト」の待合室があつて私達はそこでゆっくりと休めるようになっていた。私達が塔乗する時、一般の旅客より先にのせてくれる。先に乗る私達をだまってい送っている静かなこの人達の顔々々。印象に残った無表情な顔である。

いよいよ初めて飛行機へのり込む。ソヴィエトの飛行機の乗り具合は？ ベルトをしめる。九時十五分離陸。ゆるやかに上昇して行く。赤いランプは中々消えない。一体どうしてこう長くつき放しなのであろうか。一寸不安になる。（これは後で分った事であるが実に安全なのだそうであつた）バンプイングもなくおだやかな飛行ぶり。あざやかといいたくなる。

あまり未だ同行の人たちの事が分っていないので一面の銀世界の遙か下を眺めたりしていた。地図を出してみている人もいる様だ。けれど世界地理、世界史の先生達、或いは大学生達の事は面白い人生勉強をさせて頂いたが未だ今はお互いよく知らない人達である。

おひるが出た。キャビアが盛られてある。船の食堂で数の子がおいしかった事を思い出す。目的地タシケントまでは八時間かかる由。中間に三つの都市へ着く事になっている。

ウスリー地方の上空を、そしてチタからバイカル湖の上空

を飛び、イルクーツクへついた。シベリアとかバイカル湖、あの水の美しい大きな湖水、或いはこのイルクーツクなどという名は長いとききなれた名前である。

空港の建物はさして遠くない。降りてみる。サーと何か一面に地上を吹き飛んで来る。塩のようにサラッとした雪なのだ。小雪が舞うなどというものではない。塩が吹きつけるようだ。ウァー寒い！息が苦しい。飛行機へ帰ろうかと立ちすくむ。マフラーを頭から顔へとかけ、息のできる空間をつくって下を向いて建物へ飛び込んだ。氷点下十度だそうである。五十分程休み再び機上へ。頭からスッポリ防寒具で身を固めた人達が寒い中を旗をもって、滑走路へ向う飛行機へ信号をしているのをみて、御苦勞様といったくなる。

ノボシビルスクは第二の着陸地。この辺までは中国とそしてモンゴル人民共和国の国境近い所を飛ぶ。ノボシビルスクは人口百八十万のシベリア第一の都会という。立派な空港である。イントューリストの大きな待合室へと案内された。小休止の後、次のアルマアタへ飛ぶことになっている。

その時、天候がわるいのもう少し待つとアナウンスされる。ちっとも天候はわるくないのに、と少し不満氣に立ったり座ったり。結局二時間近く待たされた。ここでまた実に安全飛行をすることが実証された。アルマアタの上空が天候不

良なのだそうである。日本人のせっかちさでイライラする。一階のロビーには大勢の人達が木のベンチにだまって、ひっそりとこしかけている。色とりどりの帽子、厚ぼったいコートに身を固めた男女で一杯である。皆だまってこしかけている。私達は切手を買に行ったり、手紙をかいいたり、あちこち珍らしそうに歩き回っている。いつまで待たされるのか、天候もどの程度に悪いのか見当がつかない。イントューリストの人と空港の係りの女の人達はしきりなしに電話をかけている。

イントューリストのきれいな喫茶店に入ってみる。レモネードをのむ。ソ連では食卓にレモネードのびんが出ていて自由のめる。もっとも定食に含まれているわけであるが、これはあのまずいミネラルウォーターになやまされたヨーロップのことを考えると、遙かにおいしくビールものめぬ私には大助りである。私は「レモネード」とか「お湯」とかロシア語でかいてもらった一片の紙を出して見せては注文するのである。これは旅行中大切に持ち歩いたものである。

不自由しても意志の通じる方法は考えられるものである。氷点下十六度とかいうこの空港をようやく飛び立つことができたのはハバロフスク時間で午後八時である。

未だ日暮れ前で明るい。有名な天山山脈を見下ろせる上空

を飛んでいるらしい。そろそろ機内はにぎやかになった。

「あれだあれだ」「ちがうよ」とか、地図をもってワイワイとそれらしき連山に、皆窓辺へ身体をのり出して天山山脈の姿を求めた。

飛行機はカザフ共和国の中心地アルマアタへ向け南下する。上空にさしかかる頃より濃い霧で下が見えぬ。これではやはり時間通りに出発できなかった訳だと、安全飛行をすることに安心感をもつ。もやの間に地上がふいふいと見えて来た。

雲深く、小雪のアルマアタへ無事着いた。休んでいる空港から町へ続く道らしきあたりを見る。丁度田園調布の駅前の木立に似ている。なつかしい。枯木と雪とで美しい風景である。ここを十一時半に発ち、タシケントへ着いたのが十二時三十分。時計は真夜中ではあるが四時間針を戻し、午後八時半に到着したのである。シルクロードの一番目に見学するはずのタシケント。

「ソ連のホテル」

タシケントホテルは中々立派である。部屋割りが済むと、それぞれ各階の部屋に行く。ソ連はフロントはあっても、部屋の鍵をもらったり預けたりするデスクは各階の小ロビーの

前にある。太った女の人がでんとこしかけている。言葉は全然通じない。皆番号を数字で示し、鍵をもらって部屋に入る。

ウズベク特有の黒に白糸でシシユウのしてある帽子をかぶっている人達をあちこちで見かける。廊下ですれ合う泊り客もソ連人らしく身体は大きくニコツともしない。

タシケントのホテルで珍らしいことを発見した。というのは泊り客の食堂と別に大衆食堂がある。おそい夕食をとりには食堂へと案内された私は大きな食堂の戸を押して入った。ムツとする人いきれ。異様な臭いがする。タバコの煙と何か焼く臭いで何ともたまらない。何であろうか。とてもここでは食事できないと閉口していると、そこを通りぬけて奥の方に別に臭くない食堂があつて、私達はそこへ案内された。

その両方の食堂の間にコートを預けるデスクがある。時々ウズベク人の係りの小父さんが香水ふきのようなスプレー付きのびんで口を開けているお客にプープーとふいてやっている。何をしているのかおかしなかつこうである。食前か食後にしてもらうのか分らない。あのマトン（羊の肉）の臭いをとる為か、タバコの強い臭いをとる為か。タバコのくさささのみつけたのはその後のことであつて、その夜は何ともいえない悪臭で胸がわるくなつてしまつて、おまけにサラダについた

玉ネギの上にのっていたトマトを一口、口に入れたトタン、その味のわるさにまいってしまった。

タシケントホテルというところの臭いのする大衆食堂とスプレーで口に何かふきつけてもらっているウズベク人と思いつく。タシケント一のホテルに似つかわしくない大衆食堂があり、どうしてもそこへ来て食事をするのか、しかも朝食にも来ている理由らしきものが分ったのはずっと後になってである。これは後でかくことにする。



カーテンを開いて入ったソ連のことはすべて聞いていただけでは分らぬ事をこの身で経験しなくてはと、一つ一つが主婦の私には興味がある。

一日中飛行機へのったり降たりして疲れきった私はシャワーもぬるいときいていたが、ちゃんとお風呂があり、熱いお湯がなみなみと湯ぶねに満ちて行くのである。

そしてあの固形燃料をとり出し、小さいおやかんでお湯を沸かし、日本茶で一日の疲れをとったのである。食堂へ行く度、おやかを下げて行く白髪の日本人の私をもの珍らしそうにみつめる人達。例の一片の紙にかかれた字が読めないらしく、この大切な湯わかしをもらったと思って喜んで、私を困らせたのは食堂のメイドさん。

モスコの世界一の大きさを誇るホテル、ロシアでも私の下げている小さな湯沸しは知らぬ人にはニコツともしないソ連の人達にもほほえみをもたらしてくれたのである。

へお詫びへ先月号十頁上段の十四行目「ハバロフスクとい
い暖かい」の傍点の部分を「暗い」に訂正、同十九行目「タシケント」が「タミケント」になっておりました。お詫びし、訂正させていただきます。

話のくず籠

気だるい暑い日々が続く、じっとしていてもムツとする熱気があたりをよぎり、汗ばむ何とも不快な感じがする頃々です。

しかし、汗は一方では私達に生活のたのしさを教えてくれます。ひと仕事のあと緑陰ですずむ時、全身にあふれた汗が、逆に涼気を起させるかのように冷々と感じさせ、爽快さを味わせてくれます。

最近では科学の発達によりさまざまな冷房設備ができ暑い夏も汗を流すことなく快適に過すことができるようになりました。この快適に過すこと自体、人の知恵として喜ぶべきことですが、一方では玉のような汗を流すことより生ずる楽しさを忘れつつあるようです。

人は汗を流し働くなかに生れた尊さ価値感を味得するのですから、この汗は惜気なく流し、本当の爽快さを味わうことも必要ではないでしょうか。

十二 因 縁

—その7—



受 教 と 発 心 (受)

渋谷 賢 応

(長野県茅野市心光寺住職)

六処、触、受と、六つの感覚器官により、外界に接触することによって自分の知覚の中にある受け入れ態勢ができてくることを受として説かれておられます。いわば六処は感覚器官であり、触は感覚と解すべきであり、受はその反応として当然起ってくる感情といい得るわけでございます。

ただこの場合、楽しい接触には楽しみがあり、苦しい接触には苦しみがあり、楽しくも苦しくもない接触にはそのような不楽不苦受と申すようなものがあり、またそれが、眼に触れ、耳に触れ、鼻に触れ、舌に触れ、身に触れ、心に触れることによって、その各々の受が考えられるとお釈迦さまは説

明せられておられます。

要するに、外界は私たち個人にとって、むしろ不楽不苦のものであるはずなのですが、これを受けとめる私たちの器に大小あり、純不純あり、そのことがものの道理を弁えない結果となり、迷界の縁起をくりかえすことになると思われています。受により外界がはじめて我がものになり、それが私を中心とした見方となり、小さい器を以て偉大なるものをおしはかろうとし、我執を以て身勝手な解釈をしようとし、そのことが私をしてますます苦の淵に追いやると申されるのです。そして悲しいことにはこの苦しみを、私の小さい器、身勝手な我執のせいだということに気づかないで、自分の鏡に映った歪んだ醜い姿をそのまま外界の姿と勘違いして、自分を省みることなく相手を責めるのです。ほんとうに浅はかな姿と言う外ありません。

百論経に次のようなお話がございます。

「昔、雄雌二羽の鳩がおりました。二羽の鳩は仲よく一つの巢に住んでいました。秋、木の実の熟する時、それをせっせと取ってこの巢にたくわえました。秋晴れがつづきましたので運んだ木の実は乾いてしまつて、運んでも運んでも巢にいっぱいにならず、それどころか昨日よりは今日、今日よりは明日と、かえって減つていくありさまでした。

我慢できなくなった雄の鳩が妻の鳩に言いました。

『俺は実を集めるのにとっても苦勞しているのだ。お前は独りこの巢の中にいて実を食べてばかりおるではないか。見ろもう半分になってしまったではないか』

妻の鳩は答えていました。

『私独りで食べるようなことはするはずがないじゃありませんか。木の実は自然に少くなったのです』と。

しかし夫の鳩は妻の言うことを信じません。ますます怒って言いました。

『嘘をつけ、俺は食べてはいない。お前が食べなかったらこんなに少くなるはずがないではないか』

そして可愛そうに、夫は口ばしでその妻をつついて殺してしまいました。

二三日して大雨が降りました。木の実は潤を得て巢にあふれました。夫の鳩はそれを見て驚き、かつ悲しみ、悔みしました。

『あれは実なんか食べちゃあいなかったんだ。俺は何んということを仕でかしてしまつたんだ』

そして悲しい声でさけんだのです。

『ああ、お前はどこへ行ってしまつたんだ』

そしてお経は見事に結ばれています。

「凡夫の人もまたかくの如し、顛倒、懷に在り、みだりに欲樂を取りて無常を觀ぜず、重禁を犯し之を後に悔ゆ、ついに何んの及ぶ所ぞ、後ただ悲歎するはかの愚の鳩の如し」

受において過ちを犯すとこのような結果になつてしまいました。この鳩も自分の妻を殺すときには自分の考が正しいと思つて疑わなかつたのでしよう。しかしながら、自分の考の中になく大自然の姿がそこにあつたのです。「凡夫の人もまたかくの如し」です。「顛倒、懷に在り」です。こちらがまちがい、ひっくりかえつていたのです。常に自分の考を正しいと信ずることがいかに愚かしいことか。

御伝の中に次の一文がございます。

上人かたりての給はく「浄土の法門を學する住山者ありき示して云く『われすでに此の教の主旨を得たり。しかれども信心いまだおこらず、いかにしてか信心おこすべき』となげきあはせしにつきて、三宝に祈請すべきよし教訓をくはへて侍りしかば、かの僧はるかに程へて来りいはく『御教にしたがひて祈請をいたし侍りしあひだ、あるとき東大寺に詣でたりしに、おりふし棟木のあるる日にて、おびただしき大物の材木ども、いかにしてひきあぐるべしともおぼえぬと轆轤をかまへてこれをあぐるに、大木おめおめと中にまきあげられてとぶがごとし。あなふしぎと見る程に

おもふ所におとすべきにき。これを見て、良匠のはかりごとなをかくのごとし。いかにいはんや弥陀如来の善巧方便をやとおもひしおり、疑網たち所にたえて信心決定せり。これしかしながら、日頃祈請のしるしなり』とかたりき。

其の後兩三年をへてなん。種々の靈瑞を現じて往生をとげける。受教と発心とは各別なるゆへに、習学するには発心せざれども、境界の縁を見て信心をおこしけるなり。人なみなみに、浄土の法門をきき念仏の行をたつも、信心いまだおこらざらん人は、ただねんごろに心をかけてつねに思惟し、また三宝にいのり申すべきなり」とぞ仰せられける。

この山伏姿のお坊さんのなげきはそのまま私のなげきでもあるわけでございます。この浄土教のおおむねのことは頭で理解できていると思つていても、かえつてそれがわざわいしてか、肝腎かなめの信心がなかなか起らないのです。そして自分のはかない尺度だけを唯一のたよりにして、それを以てみ仏の本願をあげつらっている私です。ただこのお坊さんと私とは、どうしてこんなに信心が起らないのかとなげく心の大小と、どうか私にも信心を起させて下さいと仏法僧の三宝に願う心の有無が違つていたのです。

このお坊さんは東大寺再建の時に出くわし、自分の頭では

とうてい引き上げることができないと決めつけていた大木が、ろくろの仕かけでおめおめと空中にまきあげられてとぶように思う所に行くを見て、自分の頭にとうてい考えられなかった姿が出現するのを見て自分の頭の到らなさを知り、弥陀の本願をさとり、疑いたち所にたえて信心決定したのでした。

受教と発心とは各別であつたのです。受教とは自分の小さな器を以て教を計ろうしする姿だったので。自分の我執のみが自分を中心にして教を歪めて受けとめているにとどまるのです。宗学の勉強も、法説の聴聞も、この限りにおいては信心の糧にならないことはこれを以ても明らかなことです。聞法だけでは凡夫に信心はさずかりそうにもないようです。

「境界の縁」を見ない限り、信に入ることにはむずかしいようです。浄土の法門をきき、念仏の行を立つていながら信心のまだ起らない人は、ただねんごろに心にかけてつねに思惟しなければならなかったのです。いつもいつもそのことに素直ななやみを持たなければならなかったのです。そして、三宝に祈らなければならなかったのです。

古来信心堅固にして妙好人と言われるような方々は、よく思惟し、三宝に祈られた方々だったのでした。

細田 豊明

(東京都江東区在住)

〈シルクロードの遺品〉

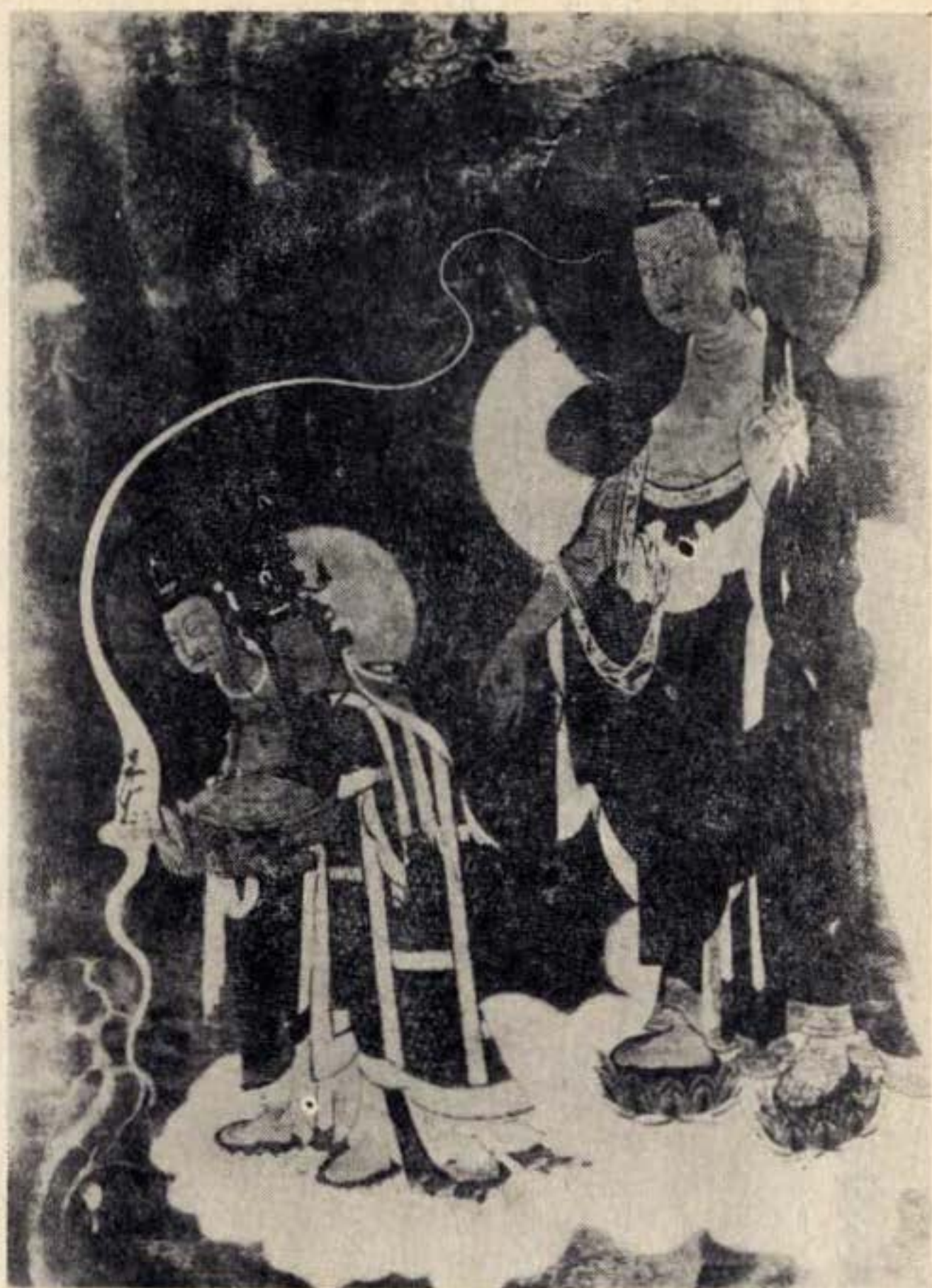
カ・ラホトの弥陀来迎図

ソ連のレニングラードにあるエルミタージュ博物館所蔵の古代ユーラシア内陸の貴重な文化財が、ソ連からはじめて海外にもちだされて「スキタイとシルクロード美術展」としてわが国で公開されています。正倉院の御物をみてもわかるように、シルクロードを経てきた文化が、わが国に大きな影響を与えていることはよく知られています。

このたび公開された百八十五点の中に「弥陀来迎図」という注目すべき仏画が一点展示されています。この仏画について説明します。これは麻布に泥絵具のような玩料をもって極彩色にかかれた、タテ百四十五センチ、ヨコ百センチの大作で、九百年の前の作品とは思われない新鮮さを感じさせる作品であります。

この来迎図は、明治四十年（一九〇七年）当時ロシアのコ

ズロフ (P.K.KONZLOFF) の調査隊が、ゴビの砂漠のはずれ、エジナ川下流地点のカラ・ホト (KHARA-KHOTO) を発掘したとき発見したものであります。カラ・ホトは現在のモンゴル、昔の中国、甘粛省の黒城のことです。天山山脈を境いして天山南路と天山北路のシルクロードが結びつく地点にある敦煌トンコウ (TUN-HUANG) の東北方に位置しています。カラ・ホトは九八二年から一二二七年まで存続した西夏という国の中心地でありました。この西夏はチベット系のタングート族の組織した国家にして、当時東西南北の大陸文化の交流点にあたり、高い文化水準にあった国であります。とくに自国の文字として、西夏文字を創作し、木版書籍の印刷物を当時すでに刊行したことは有名です。荒涼とした砂漠の中のオアシスに発展した西夏の国は、一二二六年シンギス



カンの占領するところとなり、まもなく亡び廃墟となったところであります。

西夏の宗教は中国の儒教、道教も影響しましたが、一般民間にはチベットのボン教がひろまっていた。しかし国家としては仏教を国教としたため、いろいろな仏教関係の美術

品がのこるようになったものです。ことにインドに発展した浄土教が中国にひろまり、シルクロードの逆コースをとって中国から西夏に伝来し、弥陀信仰がひろがり、弥陀来迎図がのこされたものです。

この仏画ではインドの伝統的な傾向の上に、中国的な影響と、西夏特有のものがミックスされて、えがかれた美術品であります。

この来迎図を発見したコゾロフは大正十二年（一九二三年）「カラ・ホト探検記」を刊行し、この中で写真入りの来迎図をかかげました。このロシア語の原書を考古学者として世界的に有名な故鳥居竜蔵博士が入手し、博士の弟子の三輪善之助氏に、この仏画の論説をかかせ、昭和六年（一九三一

年）雑誌「考古学」に「阿弥陀来迎像と板碑」として発表されました。三輪氏は江東区において刊行した江東区史の編さんに嘱託となられた郷土史家であります。

来迎図というのは、臨終に仏、菩薩があらわれてその人を浄土に迎える姿を絵画にしたもので聖衆来迎図と総称してい

ますが、これにはいろいろな種類があります。その源流はインド仏教に由来するものですが、美術作品としてのこるものは、ありません。中国仏教の遺品として来迎図ののこされているものはきわめて少なく、わが国に仏教が伝来してから、聖衆来迎図はたくさんつくられるようになり、平安時代から国宝級の美術品として数多くのこされています。また来迎図は浄土教美術の主体をなし、わが国絵画史発展の上からきわめて重要な地位を占めるようになりました。

ところがこのカラ・ホトの来迎図は、きわめて数少ない中国の仏画にして、この方面研究の重要な資料であり、わが国の来迎図、仏画研究の上から貴重な資料であります。

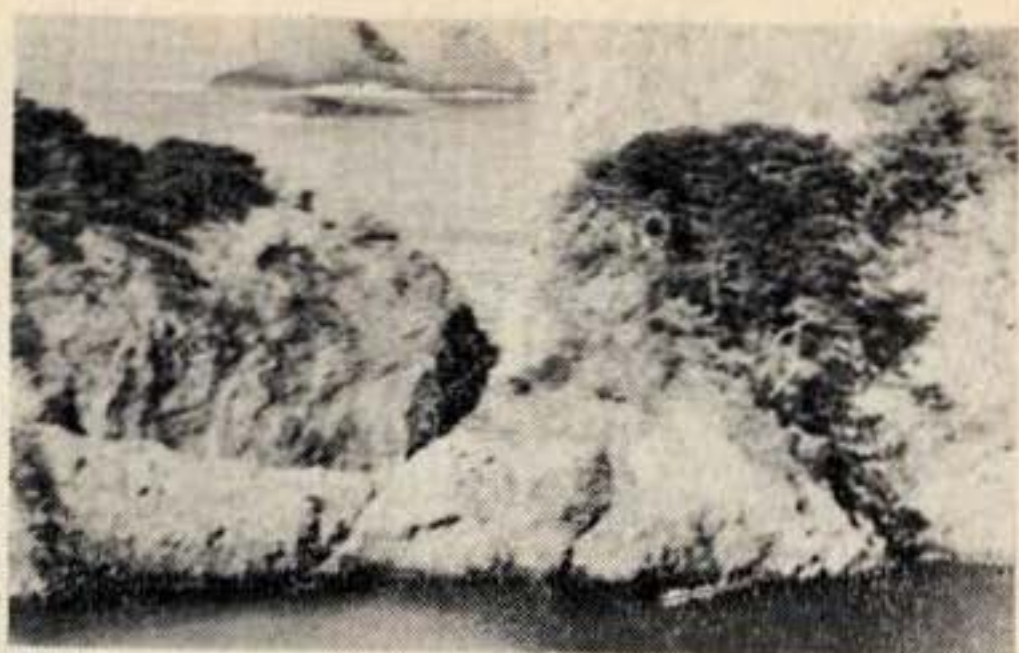
カラ・ホトの来迎図は阿弥陀如来と観音菩薩、勢至菩薩が雲に乗って来迎し、ハスの蓮台にたち、二菩薩が大きな蓮台一つを差しだし、左下すみにすわって合掌する人物が臨終に際し、童子となって生れかわり、差しだされたハスの蓮台に乗りうつろうとし、阿弥陀如来の眉間の白毫から発する光明にみちびかれて浄土に往生する姿をあらわしたものであります。

この来迎図の仏、菩薩の身体は金泥、着衣の法衣と袈裟は中国的な感じがよく、朱と緑の色彩が鮮明、面相はやや円満を欠いています。西夏の人の相をとりいれた顔たちであ

ります。バックはつよい濃紺色であるのは、乾燥地帯の空の青さの美しさが画面に影響しているかと思われます。

このカラ・ホトの来迎図がわが国の来迎図と異なる点は三つあります。第一点は白毫の光明が煙のように曲線をえがいてたなびいていますが、わが国の来迎図ではすべて直線であります。第二の点は阿弥陀如来が左手をあげて右手をさげています。わが国のものはその逆になって、右手をあげ、左手をさげています。第三の点は浄土往生を願う人物が、子供に生れかわって蓮台に乗りうつり浄土に往生しようとする姿がえがかれていますが、わが国の来迎図にはその例がまったくありません。この第三の特色は、仏教以外の宗教にはよくある思潮にして、西夏の国に当時、おこなわれていた民間宗教の反映した点かと思われます。

いずれにしてもこのカラ・ホトの来迎図は大変めずらしい来迎図であります。沙漠の乾燥地帯に埋没していたため変色汚染することなくのこったものでしょう。しかもこのような貴重な文化財が、とかく革命の名において異質の文化財を破壊してきた実例がおおいのに、個人所有になって散逸することなく、一国の文化財として大切に保全されていることは敬意に値します。



助け合いの生活を

服 部 光 喜

(東京都江東区雲光院住職)

早春の頃、弱々しい感じさえ与えた木々の新芽は、今や何者にも負けないかのように見事な緑のかたまりとなって生茂っている。注視すると、その一本一本は名の知れぬものであったり、細くひよろひよろと生えたものであり、今にもおおいかがぶさってくるかのような緑のかたまりとは似つかわしくない、そんな木々がほとんどである。

こんな木々のすがた、そこに私たちは自分のすがたをみることができないうか。木々が芽を出し、太陽の光や慈雨によって育つように、私たちもこの世に生を受けてのち、兩

親や近隣の人々のあたたかい眼差しにはぐくまれて育ち、立派に成人していくのです。

けれども木々がそれなりに精一杯に育っているのに対し、私たちはどうでしょうか。人、それは感情の動物といわれております。育つにつれ、私利私欲が芽生え、どうしてもものに執着する心が前面に押し出されてまいります。この執着心が良い方向に働いているときは、その限りではありませんが、中々そういかないのが日頃の生活です。他人のためと想ってしているはずの行ないが、いつの間にか私のものになっていることがしばしばあります。

こうした私たちの心の悩みともいえる、我執の念に一明を与えてくれますのが、法然上人の御教えです。上人は上は宮廷貴族から下は遊女・盗賊まで、教養・能力・生活環境などがそれぞれ異なった人びとに、その機根に応じて説法されたのです。

こうした中に、上人に弟子入りし出家してのち、教阿弥陀仏と号して、ふたごころない念仏行者となった天野四郎という盗人があります。

この教阿弥陀仏があるとき、上人と草庵に一夜を共にした折、夜も大分ふけたころ、上人の念仏の声で目をさまし、不思議に思ったことがありました。

しかし、その夜のお念仏のことを尋ねそこね、それから数日後、教阿弥陀仏は法然上人に自分は無学文盲であり、どんなにありがたい教えを承っても解りようがないので、ただ肝腎かなめのひと言を生涯のかたみにしたいと、たずねたのです。すると法然上人は静かな中にもきびしい口調で、

「念仏になにか甚深の義があるなどとは思ってはならぬ。念仏はまことに易行である。けれど往生する者が案外少ないのは決定の法を知らないからだ。」

先日、御房と源空がただ二人だけで寝たことがあったが、あの晩夜ふけて、こっそり念仏したが、御房は聞かれたと思う。あれがとりもなおさず決定往生の念仏である。かざる心にて申す念仏は往生しないのだ。決定往生しようと思うならば、かざる心なく、まことの心でお念仏を申すことだ」

と、諭されたのです。更に教阿弥陀仏の前業である盗人の心持ちを譬えに出され、他人の財物を盗むことは決してよいことではないが、その盗み心は他人に分るものではなく、少しもかざらない人といえる。決定往生もこの気持と同じであるといわれたのです。そして、

「人前では念仏申す気色を見せず、心にはたえず忘れないでいる。この時の念仏は阿弥陀さま以外知るよしもない。仏さまさえご承知ならば、往生更にうたがいありません」

この上人のおことばで、教阿弥陀仏は一時の疑念も去り、晴々とした心持ちになったことはいうまでもありません。

この話しは法然上人ご説法的一端として有名なものです。が、上人はたとえ相手が無学文盲の人でも、表現が平易であっても、その中にあふれる教えは真髓を極め、方便変じてまことの教えへと導びかれたのです。こうした上人の御教えの一つ一つは私たちに生活への指針を与えてくれることはいうまでもありません。

さて、今法然上人の御教えに接するとき、前述の中にありました、かざることのないお念仏。この気持が今日の私たちが一番欠けてはいないでしょうか。だれとて目先のことにとらわれ過ぎ、我執が働くのは当然でしょう。

人、それは子供の頃には素直に生きることが教えられます。子供とて教えられるがままに育ってはおります。けれど、ひとたび成人し、自立の道を歩む頃ともなると、自然、己が心に邪な心情が芽生えがちとなること必然です。

こうした中で人は素直に育つ木々のようにかざる心なく、自らの力とともに他人の力をも素直に受け入れ、お互いに助け合うことこそ、精神をスポイルされたともいえる現代生活に必要なものでしょうか。

仏事の心得とお作法

第二回

数珠について

福西賢兆

(大正大学実践仏教講師)

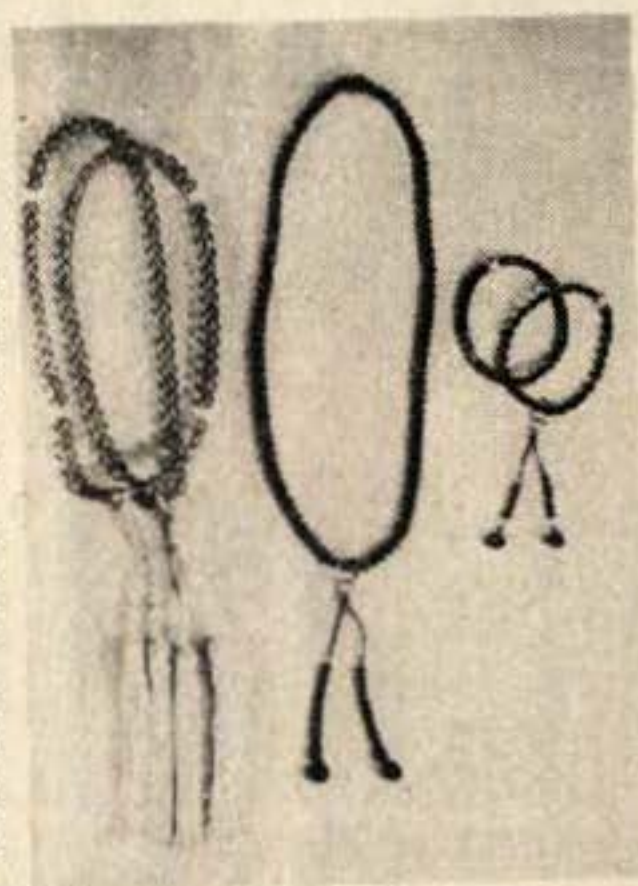


お盆がきました。日頃仕事に追いまくられて、自宅の仏壇にもろくろく手を合せたことがない人もこの日ばかりは、仏壇の清掃もされることでしょう。そんな時、引出しの奥などにしまい込んである古い数珠を見付けたりば、普段で先祖や、亡き親兄弟に対して追慕の心が足りなかったと素直に反省して、数珠のはこりを払い、掌にのせて眺めつつ目を閉ざすとこの数珠を持ってお念仏を唱えていた亡き人の傍が俱べれます。

数珠は珠数、念珠とも書き、ズズとかオモイノタマと呼ばれます。

中国浄土教の二祖で石壁玄中寺の住職をつとめた道綽禪師は、阿弥陀如来を一心に念じ

称名の数を小豆で計ることを人々に勧められたといわれ、最多は八、九十石、少い人でも二十石に及んだと伝えられています。後には木槌子の実をうがって糸を通した数珠を作り



右から日課数珠・百八念珠・莊嚴数珠

念仏を唱えたのが数珠の始まりともいわれていますが、その起源には諸説があるようです。

今日、仏事の際、そのシンボルは袈裟と数珠であります。しかし、袈裟を着けている人はあまり見かけませんが、数珠は殆んどの人が持っています。宗派教団によりその種類も多い訳ですが、威儀を正して仏事に臨む心持からいっても、お作法に合った数珠を持つべきでありましょう。

珠の数は、千八十顆を上品、百八顆を最勝、五十四顆を中品、二十七顆を下品とするといわれ、又、百八の煩悩を断ずるともいわれます。数の内には搦珠と四天という、搦珠から

数えて、八題目と二十三題目にある小珠四顆は数えません。これは真言陀羅尼を七返二十一返唱える時に必要なものです。



数珠の正しいかけ方 ①正面



② 横向き

種類は、(一)日課数珠、(二)百八念珠、(三)莊嚴数珠、(四)百万遍数珠の四種類ですが、(四)は、僧侶専用の装束用であり、(四)は特殊のものであります。

日課数珠は、法然上人のお弟子で阿波の介という陰陽師が工夫したのが始まりで、後、永禄年間(一五五八—一五六九)に称念上人によって現今の形に近いものが作られました。それは、二連珠の珠数を掛け合せた数、六万遍又は三万遍となるように作られています。

(一) 三十六顆×三十顆＝千八十顆

千八十顆×十顆×六顆＝六万遍

(二) 四十顆×二十七顆＝千八十顆

千八十顆×十顆×六顆＝六万遍

(三) 二十七顆×二十顆＝五百四十顆

五百四十顆×十顆×六顆＝三万遍

数珠をもつ時は、称名念仏の数をとる算盤の役目をするのみでなく、日々の生活の上に、如来様を手に頂いている心地で、貪欲、瞋り愚痴をとり除き、感謝と喜びに溢れた新たな毎日を迎えることができますよう。

合掌の時の正しいかけ方は、両拇珠を合し

③ 立っているとき



て、二連ごと親指にかけます。礼拝をする時は、下品礼はそのままです。中品上品の接足作礼という、み仏のおみ足を両掌に頂く時には、二輪のまま左手親指にかけ、両掌を仰向け、耳の辺りまで持ち上げ、ややしばらくし、再び合掌の形にもどります。手にもっている時は、左手首にかけておきます。百八念珠は、二輪又は三輪にして、日課数珠と同様のお作法でよいのです。

木魚や伏誂を打って念仏を称える時は、左親指で繰り、その他は、右親指で繰ります。修法は、お寺詣りの時、方丈さんに伝授して頂けば判明します。お盆のひとときを静かにお念仏を申して過ごしましょう。

〈ハガキでひとこと〉

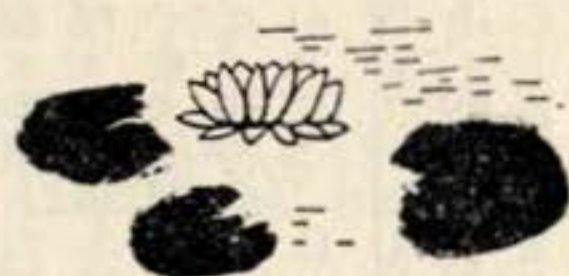
お盆と私

吉 水 智 承

(横浜市一行寺住職)

お盆といえどこのお寺でも平常の月より忙しいことは申すまでもないことで、施餓鬼をはじめ盆の諸行事、棚経廻りと仏事供養になかなか忙しいものである。

私にはそうした忙しさの外に、また別のいそがしさが課せられている。戦前には司法保護デーとか少年保護デーとかいって行われた行事が、戦後は名称をかえて、『社会を明る



くする運動』と称して、毎年七月一日より一カ月の間、いろいろの行事を展開して国民に犯罪の防止と更生保護の趣旨を理解し、協力するよう広報宣伝する運動である。

保護司を委嘱されている私は、自ら地域社会の推進的役割に立たなければならぬ一人なので、お盆の法務の間を縫って座談会に、講演会に、公開ケース研究会に、宣言パレードに如何に多くの人を集め、より効果を挙げようかと計画する苦勞がお盆を迎える度に思われるのである。

社会を明るくする運動の精神は無縁の慈をもつて衆生を摂するという、仏心の発露によら

なければならぬと信じ、結局宗教々化活動をやっているとの考えのもとに、よろこんでこの仕事に打込んでいく次第である。

岩 野 喜 久 代

(神奈川県大磯町冬柏亭在住)

下町の檀家の多いお寺に嫁したのちは、お盆はただ忙しく過ぎて亡き人の追憶にひたる暇もなかった。いまお寺から離れて近づくお盆に思い出すことは、その忙しいお寺の行事ではない。

幼少のころ、田舎の祖先のお墓へきょうだいで揃ってお詣りした時のなつかしい追憶である。明治から大正中中期にかけてのどかな寛闊な田園風景と人情は、年老いた私の心を限りもなくあたためてくれる。

東京の霊岸島から小蒸気船で半日ゆられ、千葉県五井町につく。遠浅の海をはしけで岸につく迄のもどかしさより、澄んだ潮の底にゆらゆらとゆれる海藻を見る楽しさの方がまさっていた。

人力車が人をのせて海を走るのも、その頃の東京湾風景であった。

翌朝、縁者の手で清掃された先祖の墓へぬかずき、年の順にきょうだい順次礼拝したあとの清々しい心地は忘れられない。敬虔な心を養う為にもお盆のお詣りは小さな子供も必ず伴うべきだと思う。成人したあとも心を洗ひ清める。

仏・法・僧を知らすこと

中野隆元

(東京都台東区念仏院住職)

私はお盆には必ず一通の手紙を出して、檀家に参詣させて、住職と面会し話しをすることにしている。

それは仏前に献香低頭念仏することからへ仏へそれから住職と必ず面会して仏様の話しを聞かせる、二三分、それから本堂へ行かしめ焼香する。総べて仏の光明へ法へに摂せさす。次に住職と遠慮なく話しをし、茶の一番も飲まして帰らすへ僧へ、それで時間は十分位ですむ。仏法僧の関係を具体的にするので

仲々来会者が多くなった。現代の三宝に摂するのである。

川内知光

(京都市北区西方寺住職)

お盆と言えば棚経があり、棚経は私等にとつては行である。併し年一回の檀信徒への家庭訪問であり、あわただしくはあるが対話の時期である。信仰確立への道である。この機会に年一回しかお寺参りをしない人に二回、年三回しか出来ない人に五回と先祖への墓参りをすすめる良き機会だとしております。

その他、自坊西方寺には千百余年続いた八月十六日夜、点火せられる京都五山大文字の一つの船形万燈籠の行事があり、開山慈覚大師入唐習学ののち帰途海上台風に遭い、六字の名号を海中に投じたれば、波浪たちまち静まり、依って勅命によって船形万燈籠を点火せられ四海平和、無病息災を希念する由緒あるものである。

又中興法如上人によって始められた西方寺

六斎念仏は戦時中から中絶していたが、京都府知事からの要望もあり、昨年から復活して船形万燈籠点火のあと、西方寺境内にて挙行せられる。古式豊かに点識者から愛好せられているが、老僧その運営、資金集めに忙しいお盆を更に多忙に過ごさせて頂いております。

稲岡法純

(滋賀県八日市市弘誓寺住職)

暑中御見舞申上げます。

御無沙汰致しておりますが皆様お元気ですか。今年もお盆がやってまいりました。お盆には御先祖様に感謝してお墓詣りやお寺詣りを致しましょう。そして併せて家運の隆昌と子孫の幸福とを祈りましょう。お寺では左の通りのお盆の行事を致します。

お盆の行事(八月)……(但し行事表は紙

面の都合で省略)

一日から二十五日迄毎日行事の連続で、此の手紙を檀信徒各位へ配布、御案内申してお

ります。

特に八月十四日の棚経は午前二時から檀家へ詣ります。詣る私達より檀家の方々も大変で、昔からの習慣の中に尊いものを感じます

樋口 隆 昇

(宮城県石巻市西光寺住職)

私に与えられた七月号のテーマ『お盆と私』これはお盆に対する私の感想とでも受け取って、拙文を綴ることにする。

元来仏教は印度より中国を経て日本に渡って大成した。従ってお盆の由来も印度に於て目連尊者は釈尊教勅を仰ぎ、悲母の苦妻を救ったという、個人的救済の伝説であつたものが日本に渡って、わが国民思想にとけこんで、七世の亡き祖先に対する追善供養を申しながら、ひいては有情非情の一切に対する報恩感謝の気持、あの有名な行基菩薩の歌といわれる『ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば父かと思ふ母かと思ふ』という、真に迫れる宗教的感情がお盆の行事となつて伝わってい

るのではなからうか。

仏壇を飾り、新鮮な果物の色とりどりの供物、盆提灯にゆらゆらとともる灯火、家族が集つて今は亡き人々の在りし日の追憶を物語り、薄暮になると軒端に焚く盆火、新盆を迎える家では長い竿に盆提灯のかがやくお盆の灯びまにえもいわれぬ風情である。

私の地方ではお盆の十二日には自家用車・タクシー、あるいはリヤカーに花竹筒を積み込み、自家の墓には勿論のこと、親戚や知人の墓に竹筒を打って、花を手向ける習慣も亦お盆の風情の一コマです。

私、昭和十一年八十四才の母を亡くした新盆を迎えた十五日の夜八時、棚経廻りで心身共にクタクタに疲れた身体で、お内仏で暫くお念仏していたが、いつの間にか疲れのためウトウトと睡りについたら、その時に亡き母が出て、いとも懐しき物語の数々、積る話しかもまだあるが、また来年のお盆に参るから、身体に気をつけてねと、四十男をまるで幼児の如くいたわる声をして、夢醒めた。

その後、十九才の旧制中学五年で亡くした母に対する追慕の情と一緒に、いまだに

また来年のお盆に来るからと、母の声が耳底にしみこみ、お盆を迎えることはなんと懐しき限りである。

早川 佳 乃

(神奈川県横浜市在住)

私の住む横浜市郊外の閑村も、今日では宅地造成や工場進出などにより賑々しい毎日となつてまいりました。

そんななか、生れ育った頃のもの静かなたずまいがなつかしく感ぜられますが、こうした気持をいやがうえにも盛りたててくれるのがお盆です。

家族そろつて、日中の暑さの余韻が残るなかに、もうやく心地よい風が吹きぬける道端で迎え火を焚き昔話しにふける、そしてこの後永く仕合せであるよう願う、こうした昔ながらの風物詩。こうした風習が年ごとにうすれていくことは大変残念に思えてなりません。このような世だからこそ必要なのだと、今年も焚く日を待っております。

信徒へのみち

大橋 秀雄

(東京都京中野区在住)

先日ある新聞の某宗教者の紹介記事を読んで大変興味をひかれた。その人は宗派の「信仰再編成の組織づくりで、家の宗教から個人の信仰へと体質改善に努め、他宗派でもこれにならうものもあって、純粹信仰の確立」に努めたと紹介されていた。

確かに従来仏教各宗派では、一部の宗派は別として、檀信徒といっても信者より檀家が主体であり、個人としての信徒という形は少なかったようだ。

私の家の宗旨は先祖代々から浄土宗で、出家した人もありましたが、子供の時からただ家の宗旨が浄土宗というだけで、仏教徒として特別の信仰はもたなかった。

そうした訳で少年の頃はYMCAの会員になったこともあり、約二年程はメソジスト教会附属の英語学校に通い、讃美歌を唱い、毎

週一回教会の礼拝日には出席していたが、別に洗礼をうけて信者になったわけではなかったが、キリスト教について多少の知識を得たことは、後日に役立つことにもなった。

東京で職業についてからは仕事の関係で、数年間に神道の金光教や天理教、あるいは当時の新興宗教の人の道教団などに出入し、また外国人関係ではギリシャ正教や回教徒にも接触した。ここで知ったことはキリスト教や神道や新興宗教も家の宗旨ではなく、信者個人を対象としていることである。そしてその戒律は厳重で、日常生活に結びついていて、教会寺は町の中にあつて、信者は定期的にそこへ参集しているのである。特にある教団では毎早朝、暗いうちから教会に集まり、説教をきいて朝食のお粥を会食してから散会していたが、説くところは神の教えや、道徳や、

後生を説くのではなく、教祖のおふりかえを信仰すれば毎日の生活に御利益や幸福が与えられるといったものであった。

何れにしても、教会と信者との交流や結びつきは、寺院と檀家との関係よりも密接で、先祖の供養をお委かせして、春秋の彼岸会と盂蘭盆会だけ参詣する檀家関係よりも、信者意識は強固であった。

そこでお寺さまと檀信徒の関係を「家の信仰から個人の信仰へと再編成して、体質改善を行ない純粹信仰の確立」を図る必要があるのではないだろうか。

私は戦中・戦後、数回友松円諦師の御講話を拝聴する機会があり、同師の神田寺が町家の真中に建立されて檀家をもたず、布教に専念されていると聞いたが、このような布教寺院を共同で建立して信徒との接触に努めることも一方法と思うし、また平素から布教・宣伝活動を強化して、經典や宗祖法然上人ら先覚者の布教活動を平易に出版発行して、信徒への啓蒙活動を希望し、信徒もまた、これに協力して、もって寺院と信徒個人との連繫を強めることが肝要と信ずる次第である。



ひとくち伝記（七）

古文書を集めた徹定上人

高橋良和

知恩院の諸堂の一つに古経堂というのがある。またの名を内待面所といわれているが、それはあとの名で、昔から古経堂といわれているのは、知恩院第七十五世、養鶴（うかい）徹定管長の号からきたものである。

ここで敢えて管長という名で呼んだのも意味があることで、六十一才で東京小石川の名刹伝通院から、知恩院に普山したときに、この徹定上人は、本宗初の管長職であったからで、明治五年十月十九日に、浄土宗最初の管長がこの人だったのである。

この徹定上人は、文化十一年三月十日福岡県の久留米に生れている。この年には幕府が大阪の商人鴻池善右衛門に命じて、百万両の御用金を命じた年でもあるし、富

山で暴動が起こった年でもある。

徹定上人は、当時六才にして出家得度し、十四才にしてすでに入洛して、儒学や仏教を勉強しているというのであるから、如何に向学心があったかがわかる。

そればかりではない。すぐさま江戸に赴いて、増上寺に入り、すでは縁山詩叢という著書もあるというから、なかなかの努力家であったといえる。

特に古写経についての趣味があり、増上寺第六十一世の慧嚴の命をうけて入洛し、鹿ヶ谷法然院において、蔵経を謄写したというのであるから、この努力たるや大変だったと思われる。

当時の知恩院には、今日ほど什宝はなかった。

ところがこの徹定上人が入山後、あちらこちらと親教の際には、必ずといってよいほど貴重な、写経や、文書を求めて、これを知恩院の什宝としたものである。

まず最初に十九才のころ大和に入って南都七大寺の古写経の調査を行なっているが、そのときには、西魏、隋、唐の古い經典を求めているし、和銅、養和、天平前後の古写経も相当集めたらしい。

全国にまだ汽車がない頃、この徹定上人は、大和、大阪はもちろん、遠く福岡、広島、長崎、佐賀、山口、愛知、愛媛などに赴き、いたるところに正法の弘通に努力するかたわら、古写経、古文書を探し、今日重文の菩薩藏胎経、大樓炭経、上宮聖徳法王帝説、天平年間写経日記などを知恩院に寄附しているが、今これらの古経は、いずれも国にとっても貴重なもの、まして、知恩院にこれが什宝として、保存されているのであるから、一宗としてもまことに鼻が高い。

その頃から華頂文庫というものがあつた。これが、徹定上人の集めた什宝の名であつて今もなお、華頂文庫は、知恩院にうけ継がれて、徹定上人の功績を偲んでいるのである。

今こそ浄土宗といわれる宗旨の規則や、組織がちゃん

と出来ているが、当時は廃仏棄釈のあとである。

それだけに、一宗としての組織づくりも大変であつたらしい。

まず一宗の規則をつくらなければならない。そこで、明治八年に一宗の規則を作成したのである。

この当時まだ国会が無かつたときで、明治十三年に国会開設の上申書が提出されているが、まだそれを受理されなかつたときである。

それから十年すぎた明治二十三年十一月二十五日に第一回の国会が招集されているのであるから、準備に十年もかけている時代であるのに、徹定上人は、いち早く本宗に代議制の会議を開いているというから、なかなか進歩的な人であつたといえる。

それは明治十年九月である。

凡そ会議など改まつて開いたことのない一宗の僧侶を集めて、第一回の会議を開いた。これが全国門末会議といわれている。国会より十五年も先に、これを開いている。

国会より先に開かれているのは、西本願寺の宗会といわれていたので、当時の門主が英国に赴いたときにみってきたのを、そのまま西本願寺の宗会としたというのが、

巷間つたえられているが、英国もみないで、ちゃんとこちらで門末会議を開いた記録をみて、ひょっとすると本宗の方が、議会の形式を用いたのは古いのではなかったかしら、と思うのである。

門末会はその後門末協議会と変り、今は顧問会というように変遷しているが、明治十年の門末会が国会より古いなどとは考えもしなかったこと、ここにも徹定上人の宗団運営についての先見の明があったことを知ることが出来る。

この徹定上人によって、浄土宗の宗団組織が出来たのであって、明治十二年には浄土宗寺院を東西に分け、三河以西を西部、遠江以东を東部とし、東西の二つに分けて、そのいずれにも管長を設置し、自らは西部管長に就任しているのである。

然しこの制度も明治十八年をもって廃止し、その日、知恩院、増上寺、黒谷金戒光明寺、知恩寺、清浄華院の各本山が交替で管長に就任することになって、徹定上人はその最初の管長に就任したのである。

管長と名のつくものに三回も就任した人などは、そうざらにあるわけではない。徹定上人の人柄が偲ばれるようである。

当時各地には廃仏棄釈が盛んであって、仏教の寺々などはあちらこちらで破壊されたり、廃寺になったことが多かった。そのときである。

徹定上人は、各地を回って、ところどころで、廃寺になった寺々の復興に力をつくしたのであった。

近在はもちろんのこと、九州、北海道までその足跡いたらざるところなく、遠く隠岐島の西郷町にある闍隆寺を開創したのをはじめ、数力寺、更に説教所などを新設して教線の拡張にあたった功績は大きい。

その上浄土宗の今も教学の基礎となる、西部本校を開設したのであるが、それは明治十五年のことである。

各地の寺々に松翁と記した額や、軸ものがあれば、これは徹定上人のこと、その足あとを偲ぶにふさわしい、上人の巡錫の名残りである。

弊誌も会員各位のご理解により、地味ながらも歩ませていただいておりますが、より皆様方の親しめる雑誌にと思い、広く投稿をお願いいたします。日頃のでき事は非紹介したい事など、如何ようなものでも結構でございます。お気軽にお寄せいただき、誌面を飾っていただきたく、お願いいたします。

お 願 い

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり	(再版)	安居香山著	価30. 円15
浄土宗のおしえ	(五版)	宮林昭彦著	価30. 円15
一枚起請文をめづて		村瀬秀雄著	価120. 円35
選択集私解		竹中信常著	価120. 円35
ものいう石		竹中信常著	価150. 円45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187

施本 おぼん 単価 10円
送料実費

読む人の心の琴線にふれて、妙なる共鳴をよびおこす珠玉の掌篇童話ほとけ
さまの鈴ほか、お盆とお施餓鬼のいわれなど。

●見本ご入用の節は郵券にて25円ご送附乞う。

東京都千代田区 飯田橋1-11-6 大 道 社 TEL (262) 5944
振替東京 8247

編集室 法然上人鑽仰会

浄土宗務支所内

東京都港区芝公園十九号地の一

振替東京八二一八七番

電話東京二六二局五九四四番

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋大ノ十一ノ六

印刷所 新光社印刷株式
会社

印刷人 関 二三男

発行人 佐藤 密雄

編集人 宮林 昭彦

定価 六十円

昭和四十四年七月一日 発行

昭和四十四年六月二十五日 印刷

第三種郵便物認可

昭和十年五月二日

浄土 七月号

(送料不要)

会費一カ年 金七二〇円

一部定価 六十円

「浄土」講読規定

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和四十四年六月二十五日印刷
昭和四十四年七月一日発行

浄土

第三十五卷

第七号

定価金六十円(送料六円)